

「個」を含む概念としての社会性 — 内的適応と外的適応のバランス —

小嶋 佳子

学校教育講座 (心理学)

Reconsidering “Sociality”: Well-Balanced Internal and External Adjustment

Yoshiko KOJIMA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

社会性とは

社会性とは何か。繁多 (1995) は, 「人間が人間社会の中で安全にしかも適応的に生きていくためのあらゆる能力や特性を社会性とする」とらえ方が, 最も広義な社会性の定義」(pp. 3-4), 「適応的な行動とかその社会の生活習慣, 価値規範, 行動基準にそった行動というのは, 没个性的にそれらに順応した行動をするという意味ではけっしてない。自己を確立し, 社会をよりよき方向に変革しようとする態度をも含めた積極的, 能動的態度をさしている」(p. 4)と述べ, 社会性を「個人が自己を確立しつつ, 人間社会の中で適応的に生きていくうえで必要な諸特性」(繁多, 1991, p. 11, 1995, p. 4)と包括的に定義している。また, 井上 (1997) は, 社会性の発達を「社会的個の確立への過程」としている。杉浦 (2007) では, 社会性は社会の一員として生きていくために身につけていなければならない基本的な生活能力の一つであり, 他者を理解し関わる能力や, 集団の中で他者と調整をはかりながら自分らしさを確立していくことを可能にするような能力であると, 定義されている。また, 鈴木 (2010) は, 上述の繁多の定義を引用した上で, 社会性とは, 単に社会に順応することではなく, 個人が社会に対して働きかけたり, 新しい価値を創造するといった, より積極的で能動的な態度を含む概念であると説明している。

二宮・山岸・首藤 (1992) や二宮 (1995) は, 平成元年改定の学習指導要領において, たくましく生きる人間の育成を図ることがねらいの一つとしてあげられたことから, (単なる社会性ではなく, あえて)「たくましい」社会性について検討している。そして, 二宮ら (1992) は, 「たくましい社会性」を, 「円滑な対人行動がとれ, 他者との関係を築き, 維持・発展させ, その中で自己の要求を実現できる能力」ならびに「自

己実現する過程において, 調和的な対人関係を築き, 維持・拡大できる能力」と定義した。また二宮 (1995) では, 「たくましく, しなやかな」社会性を, 「円滑な対人関係がとれ, 他者との関係を築き, 維持・発展させ, その中で自己の要求を実現できる能力」(p. 181)と定義している。

以上の社会性の定義や説明は, いずれも「個人」「個」「自分らしさ」「自己」という言葉を含んでいる。

社会性と自己

井上 (1997) は, 真の社会性は自己の発達によって支えられることを, 社会的同調を例に挙げながら説明している。すなわち, 自己の判断を伴わない同調は仲間からの逸脱を恐れた追従で, 同調した行為が望ましい行為であったとしても真の社会性とは言えず, 逆に, 自己の確固たる判断に基づいて, 向社会的でも反社会的でもない行為に同調しないことは, 非社会的, あるいは, 反社会的な行為とは言えない, というのである。

Markus & Kitayama (1991) は, 独立的自己観と相互依存的自己観を区別した。そして, こうした自己観の違いが, 認知, 感情, 動機づけ (いずれも, 対人的なものも含む) に及ぼす影響について, 多くの研究をレビューしながら検討している。佐藤 (2008) は Markus & Kitayama (1991) の研究からも, 社会性の発達は自己の発達に支えられていることがわかる, と述べている。また, セルフ・スキーマ (自己概念)¹⁾が, 他者認知に影響することを示した研究もある (たとえば, Markus, Smith, and Moreland, 1985; Carpenter, 1988)。こうした研究から考えても, 自己が社会性に深く関わっていることは想像に難くない。

小泉 (2011) も, どのように“自己”を見ているの

かによって他者との相互作用は変わってくると述べている。たとえば、「自分は、〇〇のことはわからない」と思う人は、そのわからないことを話題に取り上げることは多くないだろうし、「△△のことについて興味がある」という人は、同じ趣味の人と話に興じたりする。このように、小泉（2011）は自分についての認識が、他者との相互作用や日々の行動に大きく影響することを指摘し、自己をどのように捉えるのかという点は、社会性の育成に必要な不可欠であると考えている。

以上のように、心理学において、社会性は、「個」あるいは「自己」を含む概念としてとらえられているが、井上（1997）は、「幼児・児童の生活の中で、ともすると「個」が「社会」の中に埋没させられてしまう傾向が強いように思われる」（p. 2）と述べている（そして、それ故に、あえて「社会的個」という言葉を使い、「個」を前面に出している）。

ところで、繁多（1991）は、社会性は、「最も狭義には、他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力に限定して使われる」（p. 11）と述べている。このように、狭義の場合には社会性が対人関係能力と同様の概念になることについて繁多（1995）は、「人は他者との対人関係を円滑に営めずして、人間社会の中で適応的に生きていくことなどできるはずがない。そういう意味では、対人関係能力が社会性という概念の中核をなす部分であることに異論をはさむ人はいないであろう」（pp. 2-3）、「児童・青年期にみられる不適応症状のほとんどすべてが対人関係の問題とかかわっているということからも、対人関係の問題が社会性の中核的な部分であることは明白といつてよい

だろう」（p. 3）と述べている。

田島・松井・坂本（2008）は、社会性に関する従来の研究では、主に対人関係能力に限定して社会性が扱われることが多かったことを指摘している。このような偏りは、対人関係能力が社会性という概念の中核をなしており、「個」が「社会」の中に埋没させられていることの現れかもしれない。なお、田島ら（2008）はこうした偏りを改善すべく、最も広義の社会性を Table 1 に示す 12 の特性からなるものとして、定義し直している。

社会性のイメージ

田島ら（2008）が指摘したように、従来の研究において社会性は主に対人関係能力に限定されることが多いことと同様に、社会性という言葉から一般的にイメージされることの中にも、「個」や「自己」は含まれにくいのではないだろうか。

Figure 1 は、教職経験のある男性（以下、A 氏）のもつ社会性のイメージを、PAC（Personal Attitude Construct）分析²⁾を用いて検討した結果である。

A 氏が、社会性のイメージとして思い浮かべた単語（以下、連想語）は、Figure 1 の左側に並べた 13 個である。この中には、「個」や「自己」といった連想語は全くない。また、連想語間の類似度判定に基づいて作成したデンドログラム（Figure 1）を参考に、連想語をいくつかのカテゴリーに分け、名前をつけるよう求めたところ、A 氏は、それぞれ「伝える」、「コミュニケーション」、「友愛」、「笑顔」、「しつけ」、「ドライ

Table 1 田島・松井・坂元（2009）による社会性の要素

1. 自分に対する自信：自分のよいところや悪いところに気づいたり、自分自身を正しく理解したりして、自分が価値のある存在だと感じられること
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢：衝動的に行動せず、よく考えてから行動すること、粘り強く最後まであきらめないこと、必要な場面では我慢することなど
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢：自分自身で目標を設定したり、問題を発見したりして、自分から行動を起こせること、簡単に他の人に頼らずに自分の力でやげること、自分の行動に責任を持つことなど
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢：基本的な生活習慣を身につけ、正しい食生活やけがや病気の予防に気を配り、健康や安全に気をつけること（アルコール摂取や喫煙、薬物乱用、性に関する問題なども含む）
5. 人生の重要事態に対処する力：暮らし方や生活環境に変化をもたらしたり（たとえば、引っ越し、就職、進学）、人生に大きな影響力を与えたりするもの（たとえば、離婚、親しい人との死別、失恋など）にうまく取り組んでいくことなど
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢：何事に対しても積極的に新しい考えや方法がないかと考え、よりよい方法について知恵を絞ったりすること
7. 他の人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢：他の人に対して信頼できると感じ、思いやりをもつことや、相手の立場に立って考えたり、相手の気持ちを理解したりすること、自他の違いを尊重し認めることなど
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢：周りの人との間に生じた問題を解決することや、皆をまとめて引っ張っていくこと、周りの人に協力すること、言うべきところで自分の意見や考えをしっかりと伝えること、自分の考えを他の人にうまく伝えることなど
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち：集団の中でのルール（たとえば、順番を守る、嘘をつかない）や、社会の中で決まった約束事やしきたり（たとえば交通ルール）を守ること、善悪の判断ができること、礼儀正しく行動することなど
10. 社会の役に立とうとする気持ち：人のためになることを自ら行なうこと、困っている人を助けること、誰に対しても差別などせず公平に接しようとするなど
11. 世界の一員としての意識：地球全体の問題（環境問題など）や世界のどこかで起きている問題（たとえば紛争や飢餓）、外国の文化などに関心を持ち、地球に暮らす一員として世界中の人と助け合っていこうとする気持ちなど
12. 生命や自然を大切にすること：自分や他の人、動物や植物など生きとし生けるもの全ての生命をかけがえのないものとして大切にすること、自然を守るなど

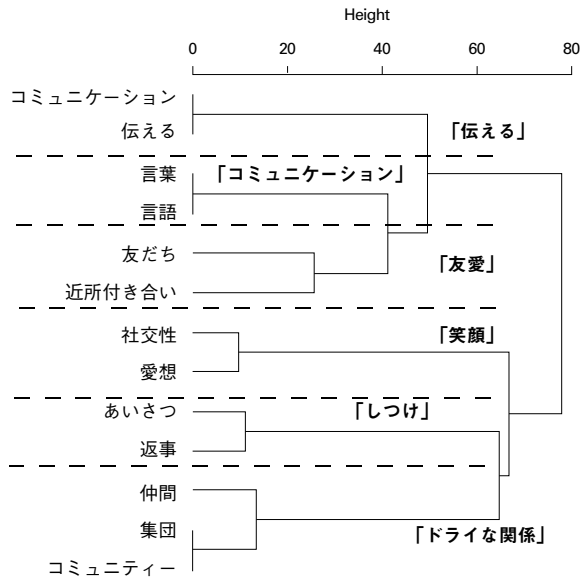


Figure 1 社会性のイメージについてのデンドログラム。左端の13語が社会性のイメージとして連想された連想語、点線は連想語を分けたカテゴリーの区切り、「」内は各カテゴリーの名前（回答者本人による命名）である。

な関係」と名付けた (Figure 1の「」内)。こちらにも、やはり「個」や「自己」に当たるような言葉はない。A氏は、決して「自己」や「個」を軽んじているわけではない。ただ、社会性のイメージとしては思い浮かばないのである。

また、社会性に関する（半期にわたる）講義の最後に、半期間の最初と最後で社会性のイメージにどのような変化があったかを尋ねてみた。得られたコメントには、「これまで社会性とは、協調性であったり、規範に対する遵守の意識であると思っていたが、授業を受け、より広いものであると知った」、「授業前の社会性のイメージは、対人関係、単純に友達の数が多い人は、社会性のある人と感じていました。授業後において、今までのイメージに加え、発達の影響や認知の影響が深く関わっていることを知った」というように、対人関係能力に限定されていたイメージが変化したことを示唆するものがあった。講義開始前のイメージがどのようなものであるかは不明確だが、「社会性という多様・多角的な見方や考え方が重要と知った」、「回数を重ねて行くにつれて、種類が豊富であるなということを感じた」というように、イメージが広がったことを述べるコメントもあった。ただし、「自己」や「個」に関連することを明記したコメントは見られなかった。また、「教育したり、何が正しいのかということを考えることが必要になったときに、はっきりしていたイメージが拡散してしまい、結局社会性とは、何なのかと感ずることが、(略)多くあったように思います」といったコメントもあった。

以上のことから、まず、一般的な社会性のイメージと広義の社会性の間にズレがあることが示唆される。また、Table 1に示されるような社会性の要素をそれぞれ説明することによって、社会性という概念が広いものであることは伝えられるが、要素の説明だけでは、新しく得た見解を統合し、社会性のイメージを再構成するには不十分な場合もあると考えられる。

社会性のイメージと社会性の教育

平成30年4月には小学校で、平成31年4月には中学校で、学習指導要領の改訂に先駆けて、道徳が教科化される。それに伴い、社会性の教育も今まで以上に求められるようになるだろう。

教育方法を検討する際に、教育に関連する教師の信念（主観的認識）を吟味することは重要である。教師の信念はこどもの学習や発達に何らかの影響を及ぼすと考えられるからである（たとえば、鹿毛・上淵・大家，1997；木村，2007；笹屋・森脇・秋田，2016；三浦，2017）。

社会性に関しても、同様のことがいえるのではないだろうか。社会性のイメージ（主観的認識）が社会性の教育の目標や方法に影響を及ぼす可能性が考えられる。SEL-8S（小泉，2011）のように、プログラムに自己に関わるスキルの育成が含まれていたとしても、実施する教師の社会性イメージに自己の概念が統合されていない場合、それぞれを別々のものとするような教育しかできないかもしれない。「教育したり、何が正しいのかということを考えることが必要になったときに、はっきりしていたイメージが拡散してしまい、結局社会性とは、何なのかと感ずる」というコメントからも、上記のような可能性が示唆される。

井上（1997）は、一般には、友だちと遊ぶのが大好きといった個性は尊重されるが、一人で過ごすことが好きという個性は抑圧されることが多く、つらい思いをしがちなのではないかと述べている。また、渡部（2000）は、自らの意志により人とのかわりをもたないことを選択しているこどもに対して、積極的な対人関係を持たせようとする援助は、そのこどもの自己評価を下げることにつながる恐れがあるだろう、と指摘する。このように、本来は個人の好みの問題であり、社会性の発達の構成要素である「個性化」として捉えるべきことに対して、狭義の社会性のイメージに基づき社会的ではないと見なす危険があるだろう。その結果、「自分らしさ」を強調する教育と、その自分らしさを抑制する教育が並立するような、「ダブルバインド」の状態になる可能性も考えられる。

近年、過剰適応という概念が注目されている。浅井（2012）によると、2000年以降（特に2006年以降）、その文献数は急激に増えている。過剰適応にはいくつか

の定義があるが、多くのものは内的に不適応な状態と外的に過剰に適応³⁾している状態の両方の側面が含まれている(浅井, 2012参照)。たとえば、蒲原・中原(2003)では、社会的な適応を内的な適応よりも優先し、いわゆる「いい子」見えていたこどもが、社会生活に支障をきたしている状態と定義されている。こうした過剰適応の一因として、社会性を、個性化と社会化が絡み合った自己の発達として捉える(渡辺・伊藤・杉村, 2008参照)ことなく、狭義の社会性のイメージから形造られた「社会的」な姿をこどもに求めることがあるのではないか。

再度、社会性とは

本稿の最初に引用した、繁多(1991, 1995)の「個人が自己を確立しつつ、人間社会の中で適応的に生きていくうえで必要な諸特性」という社会性の定義は、多くの文献で引用されており、繁多自身が述べているようにかなり包括的な定義であると言えよう。ところで、適応は、過剰適応の定義にも見られるように、内的適応と外的適応に分けられる。また、渡部(2000)は、あるこどもに対して何らかの援助をする場合、そのこどもの外的適応に関する情報のみではなく、内的適応に関する情報も含めた2つの側面からの検討が必要であろうと述べている。

そこで、本稿では、繁多(1991, 1995)の定義を参考に、社会性を「所属する社会の中で、内的・外的の両方にバランスよく適応して生きていくために必要なスキルや性質、考え方・認識、態度等の諸特性の総称」と再定義してみたい。

内的な適応のためには、個の確立や個人から社会への働きかけも必要である。また、外的な適応を無視するのではなく、内的適応とのバランスを鑑みながら、他者あるいはより広く社会との調整を図ることで、社会の中で、その一員として適応的に生きていくことが可能になると考えられる。すなわち、このように表現することで、「個」と「社会」という、対立した印象を抱きやすい言葉を使わず、しかし、個の確立と社会との調和のどちらも含めることができると考える。また、内的適応を明示することで、過剰適応のような問題を意識しやすくなることも期待される。

具体的な諸特性の内容は、田島ら(2008)の最も広義の社会性を構成する要素(Table 1)が、現時点で最も広義で、整理されたものであると考える。しかし、前述の社会性のイメージの変化に関するコメントからは、個々の社会性の要素を統合する概念を明確に示し、その概念と要素の関連を説明することも必要であると、推察される。

今後の課題

本稿では、定義を中心に社会性の概念を確認し、社会性に対する素朴なイメージとの比較をしながら、再定義を試みた。こうした再定義をすることで、より広い社会性の概念をイメージしやすくなるかどうか、社会性の概念を再構成できるかどうかについて検討することは今後の課題である。この検討の前に、まず、社会性の素朴なイメージについて、より多くのデータに基づいて検討し、心理学での広義の社会性の定義との差異を明らかにする必要があるだろう。田島ら(2008)では、親や教員に、Table 1の12の要素をどの程度重要であるかと考えるか、身につけさせるのがどの程度難しいかといったことは尋ねていた。しかし、そもそもそれらの要素を社会性を構成する要素として捉えているかどうか、要素間の関係についてどのように認識しているのか、といったことについては検討していない。

社会性に対する素朴なイメージの検討と共に、対人関係能力に限定された社会性のイメージよりも、自己の概念が統合され、内的・外的適応の両方を意識したイメージの方が、こどもの内的適応と外的適応のバランスがとれ、「個」を押しつぶすことのない社会性の教育につながるかどうかを検討することも、今後の重要な課題の1つである。

引用文献

- 浅井 継悟(2012). 日本における過剰適応研究の研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 287-294.
- Carpenter, S. L. (1988). Self-relevance and goal-directed processing in the recall and weighting of information about others. *Journal of Experimental Social Psychology*, 24, 310-322.
- 繁多 進(1991). 社会性の発達とは 繁多 進・青柳 肇・田島 信元・矢沢 圭介(編) 社会性の発達心理学 (pp. 9-16) 福村出版
- 繁多 進(1995). 社会性の発達を考える 二宮 克美・繁多 進(執筆代表) たくましい社会性を育てる (pp. 1-17) 有斐閣
- 池上 知子・遠藤 由美(1998). グラフィック社会心理学 サイエンス社
- 井上 健治(1997). 社会性とは何か—社会と個— 井上 健治・久保 ゆかり(編) 子どもの社会的発達 (pp. 1-6) 東京大学出版会
- 鹿毛 雅治・上淵 寿・大家 まゆみ(1997). 教育方法に関する教師の自律性支援の志向性が授業過程と児童の態度に及ぼす影響 教育心理学研究, 45, 192-202.
- 蒲原 齊子・中原 弘之(2003). 過剰適応児を生み出す環境要因の心理学—いわゆる良い子— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 549.
- 木村 典子(2007). 家庭科教員志望者の家庭科観と生活経験の関連 文化女子大学紀要 服装学・造形学研究, 38, 95-106.
- 小泉 令三(2011). 子どもの人間関係能力を育てるSEL-8S 1 社会性と情動の学習 (SEL-8s) の導入と実践 ミネルヴァ書房

- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H., Smith, J., & Moreland, R. L. (1985). Role of self-schemata on the perception of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1491-1521.
- 三浦 明日香 (2017). 教員養成課程の大学生の音楽科に対する教科観—教科指導の実践力につながる教科観に注目して—平成28年度愛知教育大学卒業論文 (未公開)
- 内藤 哲雄 (1997). PAC 分析実施法入門 個を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 二宮 克美 (1995). たくましい社会性を育てる 二宮 克美・繁多 進 (執筆代表) たくましい社会性を育てる (pp. 171-186) 有斐閣
- 二宮 克美・山岸 明子・首藤 敏元 (1992). たくましい社会性を測るには、どうしたらよいか 日本性格心理学会第1回大会発表論文集, 54.
- 笹屋 孝允・森脇 健夫・秋田 喜代美 (2016). 小学校教師の学級経営観と授業実践の関係の検討—学年共同の研究授業における3学級同一内容の説明文授業の比較— 三重大学教育学部研究紀要, 67, 375-388.
- 佐藤 淑子 (2008). 社会と文化 渡辺 弥生・伊藤 順子・杉村 伸一郎 (編) 原著で学ぶ社会性の発達 (pp. 18-19) ナカニシヤ出版
- 澤田 匡人 (2014). 本音と建前の天秤—適応にまつわるパーソナリティ研究の動向— 教育心理学年報, 53, 37-49.
- 鈴木 みゆき (2010). 社会性の発達 櫻井 茂男 (編) たのしく学べる最新発達心理学 (pp. 143-160) 図書文化
- 杉浦 淳吉 (2007). 社会性の発達 多鹿 秀継・竹内 顕彰 (編著) 発達・学習の心理学 (pp. 119-130) 学文社
- 田島 祥・松尾 由美・坂元 章 (2008). 社会性の育成に関する親や教師の意識—広義の社会性を定義して— 人間文化創成科学論叢 (お茶の水大学), 11, 289-297.
- 土田 義郎 (2016) PAC-Assist 2 金沢工業大学 建築系 土田研究室 Retrieved from <http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (2016年11月22日)
- 渡部 玲二郎 (2000). 社会的問題解決能力の発達 堀野緑・濱口佳和・宮下一博 (編著) 子どものパーソナリティと社会性の発達—測定尺度つき— (pp. 188-201) 北大路書房
- 渡辺 弥生・伊藤 順子・杉村 伸一郎 (編) (2008). 原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版

外的適応は環境との折り合い (澤田, 2014), 個人が属する文化や社会的環境に対する適応 (渡部, 2000) を意味する。

謝辞

社会性のイメージについてコメントを書いて下さった受講生の皆様, そしてPAC分析の結果の使用を快諾して下さったAさんに深く感謝いたします。

(2017年9月25日受理)

注

- ¹⁾自己についての構造化された知識をセルフ・スキーマと呼ぶ。セルフ・スキーマは、自己概念を、情報処理論的見地から構造的な特徴を想定してとらえ直したものと見える (池上・遠藤, 1998参照)。
- ²⁾PAC分析とは、個人ごとに態度やイメージの構造を分析するために、内藤 (1997) によって開発されたものである。内藤 (1997) はPAC分析を、「自由連想 (アクセス) を利用して、態度やイメージの個人内構造を測定し、診断・分析する理論と技法」(p. 1) であると述べている。PAC分析の実施にあたっては、土田 (2016) 開発のPAC分析支援ソフトPAC-Assist 2を用いた。
- ³⁾内的適応は、個人の内的欲求充足 (澤田, 2014), 幸福感や満足感を体験し、心的状態が安定していること (渡部, 2000) を意味する。